

平成27年度 第3回東広島市総合教育会議 議事録

1 日 時 平成27年11月17日(火)
開会15時30分 閉会17時00分

2 会 場 東広島市役所本館3階303会議室

3 出席者 (構成員)
東広島市長 藏田 義雄
東広島市教育委員会
教育長 下川 聖二
委 員 渡部 和彦(教育長職務代理者)
委 員 織田 壽子
委 員 長嶋 香穂里
委 員 京極 秀樹

(説明のために出席した者)
副市長 槇原 晃二
福祉部長 和田 幸三
学校教育部長 増田 泰二
生涯学習部長 大河 淳
理事 信井 充壯

(事務局関係)
総務部長 松尾 祐介
総務部次長兼総務課長 大垣 勇人
総務課 課長補佐兼行政経営係長 大石 美廣
行政経営係 主任 長尾 竜次

4 議 事 (1) 東広島市教育大綱(案)について
(2) 「東広島市まち・ひと・しごと創生総合戦略」における教育施策の推進について

5 内 容
○開 会

○藏田市長あいさつ

○議 事

(1) 東広島市教育大綱（案）について（事務局説明【資料1】）

＜藏田市長＞

東広島市教育大綱については、前回の会議でいただいたご意見を基に、慎重に検討を行い、責任を持ってつくらせていただいておりますので、ご了承いただければと思っております。

また、この修正案により、本市の教育大綱とさせていただきたいと思いますが、よろしいでしょうか。

（異議なし）

それでは、本案をもって東広島市教育大綱とさせていただきます。

これまで、この総合教育会議におきまして、協議、調整し策定してきました大綱のもとに、より一層連携して本市の教育行政に取り組んでいきたいと考えておりますので、よろしくお願いします。

また、完成版の大綱につきましては改めてお渡しさせていただきます。

議事の「(1) 東広島市教育大綱（案）」については、ここまでといたします。

(2) 「東広島市まち・ひと・しごと創生総合戦略」における教育施策の推進について

＜藏田市長＞

次に、議事の「(2)『東広島市まち・ひと・しごと創生総合戦略』における教育施策の推進について」でございます。

地方創生については、メディアでも盛んに取り上げられておりますが、今後、わが国の人口が加速度的に減少することが予想されており、地域経済において、人口減少が地域経済の縮小を呼び、地域経済の縮小が人口減少を加速させるという負のスパイラルに陥るリスクが高まるとされております。

こうした状況を受けて、国では平成26年11月に「まち・ひと・しごと創生法」を制定し、人口減少の克服と地方創生をあわせて行うことにより、将来にわたって活力ある日本社会を維持することを目指すとともに、各地方自治体においても「長期人口ビジョン」とそれを踏まえた「地方版総合戦略」の策定に努めるよう方針を示されたわけです。

それに基づき、本市では、お配りしております「東広島市まち・ひと・しごと創生総合戦略」を先月、策定しております。これを本市の成長に資する施策の核と位置付けまして、本市の強みを活かした施策を着実に推進し、人々から選ばれる『人口20万都市』を実現し、県央の中核市として、それに相応しいまちを構築してまいりたいと考えておるところでございます。

本日は時間も限られておりますので、全体の説明は省略いたしますが、まずは、本計画の概要と教育施策に関することにつきまして、事務局から説明していただきますようお願いいたします。

(事務局説明【資料2】)

<藏田市長>

事務局の説明にもありましたが、本市の人口は未だに増加傾向を示しておりますが、いずれは、国や他の自治体と同じように、人口が減少し、地域経済などにも大きく影響を及ぼす時期がやってくると予想されます。

国全体で人口減少へ向かう中ですので、他の市町では、数年後の人口を今より何人ぐらい少ないというところで留めようとする目標設定が多く見られます。そのような中で、本市では、総合戦略の基本理念を「人々から選ばれる『人口20万都市』への挑戦」として、今よりも人口を増やしながら中核市の要件でもある人口20万都市としていくことを目指しております。この目標を達成するのはかなりハードルの高いことであることは認識しております。この目標を達成するのはかなりハードルの高いことであることは認識しております。この目標を達成するのはかなりハードルの高いことであることは認識しております。

また、本市の成長力を持続し、広島県さらには中四国地方をリードするまちに発展させていきたい。東広島市に住んで良かった、あるいは、東広島市に住みたいと思われる魅力あるまちにしていくなためにも、熱意をもって市民一丸となって挑戦すれば、必ず達成できるものと思っております。

その中で、教育分野におきましては、「教育環境の充実」を図りながら、「子育てするなら東広島！」と言われるように、本市の魅力を高めていかなければならないと考えております。

そうしたことから、本日は、「本市の魅力を高め、『人口20万都市』を実現するためには、どうすればよいか」といった視点で、総合戦略に掲げている教育施策について、意見交換を行いたいと考えておりますので、よろしくお願いいたします。

まず、「地域と一体となった学校教育の推進」について、取り上げていきたいと思いますが、「地域と一体となった学校教育の推進」というのは、意外とできそうでできていないところも随分あるのではないかと思います。

学校は地域の核となるところです。また、地域には色々な技術を持った方々が沢山いらっしゃいます。4月の会議では、織田委員から寺西塾の話を聞かせていただきましたが、地域と連携していく中で、色々な取り組みができると思っております。子どもたちともお互いに顔を知ることができますし、地域に愛着を持っていただきたいと思います。

学校を地域の拠点として活用していくことで、自然と地域で子どもを見守りながら育てる環境ができるのではないかと思います。そういった意味でも、それぞれの地域の特色を持った魅力ある環境づくりが必要になってくると思うのですが、「住民の方々との身近な活動拠点」、「学校施設の有効活用」、「体験学習の充実」というのがでてくると思うのですが、この3点ぐらいで皆様方から見られて、あるいは感じたことがございましたら、ご意見をいただければと思います。

教育長いかがでしょうか。

<下川教育長>

教育委員会が学校教育を進めていく中で、3つのキーワードを持っております。

「誇り」、「信頼」、そして最後が「貢献」ということで、地域の方から、本市の小学校、中学校とも色々と支えてもらっております。色々な面でお世話になっておりますが、そういった地域から支えられる学校であるということも勿論大切です。

それとともに、地域を支える学校ということで、学校からも積極的に地域に出て行き、子どもにも地域との関わりを考えさせていくということが大事であると考え、色々な取組みをしております。和文化的な取組みもその一つですが、子どもたちが住んでいる地域に愛着を持ち、自分たちの地域は素晴らしい、ここで将来も住みたいと。そうはいつでも仕事の関係で地元から外に出るということもあるでしょうが、いずれ歳をとったら地元へ帰って来たいという子どもを育てることが、人口流出を食い止める一つの大きな教育の面では大事なことでないかと思っております。

そのために、地域との関わりを深める取組みを学校でもやっております。具体的に言いますと、毎週1回、放課後子ども教室をほとんどの小学校区で実施しており、地域の方、ボランティア、大学生にもお手伝いいただいて、子どもたちに色々な体験の場を学校や地域センター等で提供しております。本当はそういうことをしなくても、地域とのつながりが自然に持てれば良いのですが、今の社会情勢の中ではなかなかそういうことが難しいので、敢えてそういうことを仕組んでいき、輪を広げていくことが大事ではないかということで、学校でも実施しているところでございます。

<藏田市長>

地域の輪というところが一番だと思いますが、色々なことをお話しいただきましてありがとうございます。その中で、渡部委員、もしございましたらお願いします。

<渡部委員>

本市の西条地区は人口が集約化されてきておりますが、離れたところでは色々な面で問題といいますか差が出てきているのではないかと思います。

しかし、教育という点から見ますと、田舎というのは一つの財産だと思います。

例えば、東京や大阪の大都市の子どもたちというのは、自然、田舎というものに対しての憧れがあるのですが、実際、そういった機会が少ない。

そういうことで、夏休みなどの時期にでも、そういう子どもたちを東広島市の方へ受け入れられて、本市の子どもたちとの交流であるとか、地域の人たちとのふれあいの機会をつくってあげて、それを一つの核として、その思い出が将来の人のつながり、あるいは子どもの話を聞いた保護者の方が一度行ってみたいというようなことで、そうした一つの交流もこれから一つの戦略として考えて良いのではないかと思っております。

稲の栽培など、これからいろいろと苦しい時期ではありますが、人とのつながりの中で新しい活力というのを生み出していくチャンスがあるのではないかと思っております。

<藏田市長>

田舎が財産というのはいいですね。ふるさとをしっかりと持っている。その思いがあるというのが一番強いのではないかと思います。

織田委員、ございましたらお願いします。

<織田委員>

先ほどからお話を聞かせていただいて、どこの学校も地域との交流といいますか、地域の人たちに学校に来ていただいてというのがありますが、私の住んでいる地域も、最近、地域ごとに子どもを巻き込んで行事をかなり活発に行っておられます。

渡部委員がおっしゃるように、そういうところへ都会から親戚が来て、田舎っていいなという体験をすることが、「子育てするなら東広島」という言葉に合っていくのではないかなと思っております。

行政の方でご指導なさっているのかなと思いますが、最近、そういう地域の行事が多いと感じております。

<藏田市長>

行政の方から地域の行事をどんどんやって下さいということはあまり言うてはいないのですが、地域の特色を出していただきたい、あるいは、地域の活性化のために色々と考えていただいたら本市もご支援しますということはお伝えしております。ですから、地域の方々がそれぞれ考えられていただいているのだと思います。

確かに、地域の子どもたちと都会の子どもたちが一緒にというのも、また良い経験ではないかと思います。

京極委員、ございましたらお願いします。

<京極委員>

お話にありましたように、この地域の自然を生かすということがすごく大事だと思います。教育大綱の中に大学の先端技術に触れさせてということもありますが、それより自然の方がきっと大事で、この前の河内小学校の例もありますし、地域の方が本当に親身になって、子どもたちを育てて子どもたちと一緒に地域を支えているという取組みが各地で起きることが大事だと思います。

東広島市は海から山までありますので、それぞれの地域でそういう特色を生かした活動を具体的にしていくことが大事だと思います。

人口を見ると、高齢人口が段々と増えておりますので、そういう方をうまく取り入れた組織づくりをして、小中学校、幼稚園も含めて連携していく体制をつくらないとなかなかうまくいかないと思います。そういう体制づくりをすることが大事だと思っております。

<藏田市長>

体制づくりの話をしていただきました。子どもたちの人数が多いところはそうでもない

ですが、ちょっと地方へ行きますと生徒が少なくなっていることもありまして、地域の方も一緒になってやらないと子どもたちがかわいそうだなと思うことも随分あるのではないかと考えております。

長嶋委員、お願いします。

<長嶋委員>

私は団地に住んでいるのですが、先程、織田委員が言われたのと反対に、古くからいる方々が一生懸命色々なことを提供しても、若い方がそこへ参加してくれないという現実がありまして、夏祭りであるとか秋祭りであるとかというのも参加してくれる子どもたち、親御さんというのが限られてきています。いつも同じメンバーになりがちです。

若い方を、うまく皆と一緒に遊んだり活動したりしていただけるような働きかけを、市の方からもしていただければと思います。個人単位では限界があり、団地の中の自治会ではどうしようかという話をいつもしています。子どもたちとの関わりがどうしても高齢者の方ではなくってしまうので、自分たちの住んでいる土地に、どんな子どもがいるのかわからないという方も結構います。

子どもたちに参加してもらって、いつも身近に子どもたちの顔が見えるという、いつもわかっているという目があるということを、何か良い形で進めていければと思います。

<藏田市長>

おっしゃられることは良く分かります。溶け込んでいただくためにはどうすればよいのか。溶け込もうとされている方々の気持ちもよく分かります。団地の人は団地の人で仲良くなれるのですが、なかなか地域とは難しいところもあり、でも、何かのきっかけをつくり溶け込んでいただいたら、子どもたちもみなさんに周知していただけるのではないかと思います。

<下川教育長>

関わりの深いところとそうでないところと色々あると思いますが、例えば、子どもが近くで遊んでいて、その声が非常に心地よく感じるか、それとも迷惑に感じるかというのは、どれだけ関わりがあるかということと非常に関係があると思います。

やはり、先ほど言われた色々な行事、祭りなどを盛んにしていただき、子どもが楽しめる場を提供していただいていることは大変ありがたいのですが、ややもすると大人が全部お膳立てして、さあ子どもはここに来なさいと、そういう形ではなかなかうまくいかない。

そういうものを子どもと地域の大人、高齢者が一緒に、例えば、祭りなら祭りの準備をしていくとか、それに子どもが参加することで大人も子どもの名前も覚え、いろいろなことで子どもってやっぱりかわいいなと、子どもが楽しく遊んでいる姿っていいなという風に思ってもらえるようになってくるのではないかと思います。

子どもが参加、体験できるような行事をつくっていく必要があると思います。現にそうして頑張っているところもたくさんあると思います。

<藏田市長>

地域によってはうまく溶け込んでいただいているところもありますし、無理やり引っ張り出してうまくやっているところもあります。参考にできるところは随分あるのではないかと思います。

続いて「11-2 キャリア教育の推進」につきまして、本市のキャリア教育は遅れているのかな、あるいはどこまで進んでいるのかなということがあるのですが、やはり子どもたち一人ひとりの将来のためにも、生きる力とたくましさ、これを身に付けて欲しいと思っています。

大学と連携できることは本市の大きな魅力でありますし、また、大学の魅力アップにもつながるような取組みが一緒にできれば他市にない魅力になると思いますが、京極委員、その辺りで何か良いアイデアがあればお願いします。

<京極委員>

東広島市の特徴というのは大学があるということが大事で、総合大学の広島大学があり、工学系の近畿大学工学部があり、福祉系の広島国際大学があり、芸術系のエリザベト音学大学があり、それぞれに特徴があります。

同じような大学ではないので、それを生かすことが大事で、人材がここにたくさん埋まっていると思います。なかなか難しいですが、それを生かすようにしなければいけないし、我々大学も学生教育も含めて、地域との連携を図るというのがすごく大事で、もっと努力しなければいけないのかとも思います。

教員も出張講義などで地域にも出さしていただいていると思いますが、最近の大学も結構忙しくて、反省するところもありますが、何となく義務的に出ていくという感じもなくはないのです。そこは、我々も反省して、大学としても、もう一度、地域にどのような形で貢献できるのかということを考えなければならないと思っています。

具体的ではないですが、我々のところは工学系ですから、できるだけそういうことを生かした教室などに地域の子どもたちにたくさん参加して頂いてできるのではないかと考えておりますし、そこに学生も入れていただくと学生も育つと思います。

そうすると地域との連携もできますので、その仕組みをもう一度考えさせていただければと思っています。

<藏田市長>

工学関係を小学生、あるいは中学生の初めくらいに見た子どもたちが、それにすごく興味を持ち、その道に進んでいく子も随分いるそうです。

最初に受けた強烈な印象というのが自分の進路を随分と変えるようなこともありますので、子どもたちを引っ張り込んでいただいて、良いところを見せてあげられたらと思います。

<京極委員>

我々も結構先端的なところもしていますし、できるだけ開放もしており、小学生や地域の方が来られてということもあります。

教育の一番大事なことは、楽しいと思わせたらおしまいなのです。

それを我々がどうやるかということ、教員として最近考えることが多いので、我々は工学の中で楽しいことを、状況をたくさんつくって子どもたちに合う喜び、楽しみを与えるような形をできるだけとっていきたいと思いますし、大学の中でも提案をさせていただければと思っています。

<藏田市長>

おそらく子どもたちはそういった瞬間、目がすごく輝くと思います。それが一番要るのではないかと思います。

<京極委員>

本当にそうだと思います。我々は今、ロボットをやっていますが、やはり見ると目が点になっている子が結構います。

私は3Dプリンターをやっており、それもやはり興味を持って見ている子がいます。

そういうものをたくさん、我々の大学だけではなくみんなでやっていくと、この地域は本当に理科の好きな子、技術者として育ってくれる子、外へ出てまたこちらへ帰ってくる子というのが出てくるのではないかと思います、努力をさせていただきます。

<藏田市長>

渡部委員、ございましたらお願いします。

<渡部委員>

京極委員がおっしゃられたように、ここの特徴、本市の宝がいくつかありますが、その中の一つに大学という宝があります。

しかし、地域、市民が、私の大学、私たちの学生というところにはまだなっていない。しっくりいっていないところがある。そうなるためには、まだ時間がかかるかなという気がします。

しかし、実際、公開授業や公開講座という形で大学と市民との接点がございまして、これは段々と新しい文化というものが生まれてきつつあることは間違いない。

特に、教育面で子どもたちということに関して言えば、例えば、将来、科学者になりたいとか、看護師になりたいとか、医者になりたいとか、消防士になりたいとか、そういう夢をしっかり持つことが大事です。小学生や中学生くらいに大きな夢を見て、それに向かって頑張り、宇宙飛行士になったとか、そういう例ってたくさんあるんですね。

ですから、小学生だからといって本物のところが掘められていないのではないのかというのは大間違いで、子どもの直感力、感性で物事の重要性や自分にぴったりのことを

感じられるものです。

そういう点では、もっと市の方からもアタックして大学の財産を引き出してくるということも大事なのではないかと思います。

広島大学の例で言いますと、産学地域連携センターという部署がございまして、まさに地域との連携というのを組織的に行う部署でございまして。それがサイエンスパークの中にあり、私もその一角に研究室があるのですが、意外と市民に知られていません。大学ももっとそういう面で本市のために活動、努力をしなければいけないと思いますが、お互いに意見を言い、協力関係をもう少し築いていく必要があるのではないかと思います。

せっかく4つの大学があるのですから、大いにそういう知識の利を経験して、引き出して、それを活用してもらいたいと思います。

<藏田市長>

市民の大学、私の大学というのが非常に印象に残りましたが、活用の仕方が私はまだまだ下手なのかなと思ひまして、東広島の大学ですよと言えるようにやらなければいけないと思います。

続いて「11-3 和文化教育の推進」ですが、実は先日驚いたのですが、市外から来られた方が自分の住んでいる地域の事を話されまして、それぞれの学校では和文化教育をやっていますが、行政をあげてやっているのは初めて聞きましたということをおっしゃった方がいらっしゃいました。

本市の子どもたちも和 문화に取り組める環境があるということは良い環境だと思っておりますが、そうした中でまだまだこういったことも取り組んでいただきたいとか、和文化を通じてこういう風になっていただきたいというところがあればお願いします。

<長嶋委員>

それぞれの学校で和文化学習というのはされていると思うのですが、学校同士の交流がないだけに、他の学校でどのような教育をされているのかということが子どもたちの中でわからないのです。保護者としても、他の学校がどのようなことをしているのかということが見えにくい、わからないと思うのです。

来年「くらら」もできますし、それぞれの学校の和文化教育の取組みを発表できるような場があつて、お互いに刺激し合えるようなことができれば、より学習の取組みもアップしていくのではないかと思います。保護者としても他の子どもものものも見てみたいと思いますので、そういう取組みができればぜひお願いしたいなと思います。

<藏田市長>

「くらら」で和文化対抗といったようなことをやってみますか。

<下川教育長>

今、検討しております。どのような形でできるか、学校数も多いので難しい面もあるの

ですが、子ども同士がそういう形で交流でき、見て、すごいな、いいなと。自分のところもこういう風にやっているよというのを見てもらう、そういう交流も可能な範囲でできればいいなと思っております。今は、市民、保護者に見てもらうというのが中心ですので、今後検討していきたいと思えます。

<藏田市長>

織田委員、いかがですか。

<織田委員>

地域の特色を生かしたというところでやっていかないとと思えます。技能的なものとか演技であるとかというところへいくと、先生たちもしんどくなると思えます。

今おっしゃったように交流することは刺激になるし、良いことではないかと思えます。和文化教育と一口に言っても、学校が中心になって進めた和文化教育と、地域と学校が一緒になって進めたものと、地域が独自で神楽などで子どもを育てていくという3つの和文化教育があると思えます。それぞれを大事にさせていただくのかなと感じております。

全部学校が中心になって和文化教育を進めるのは、ないところでは大事なことだと思いますが、地域の良さ、地域の人たちの持っている和文化を子どもたちに伝えていくということをしかりとやっていただきたいと思えます。

<藏田市長>

よく言われるのですが、その地域には文化も歴史も伝統もあると。継承する生徒たちも随分興味を持っているということもよく言われます。

では、どうやってつなげるかということになりますと難しいところがあるかも知れませんが、地域の人たちが少し力を出していただきたら、凄いいものができるのではないかとと思えます。

やはり、和文化というのはチームワークやみんなでこれを成し遂げた達成感、成し遂げる責任感という今一番必要なものがここにあるのではないかとと思っております。

ぜひ、これは続けていただきたいと思えますし、特色も出していただきたい。子どもたちのためには絶対にマイナスにならないと思っておりますのでよろしくお願いします。

続いて、「小中一貫・接続教育の推進」についてですが、「小中学校が義務教育9年間の目標、責任、学力観、指導観等を共有し」ということで書いてありますが、こちらの方も大いに進めなければいけない時期に来ているかと思っております。

そうした中で、小中一貫について、これはどなたということではなく、思いがある方が言うていただきたらと思えます。ご遠慮なしにお願いします。

<下川教育長>

市長がおっしゃったように、本市の場合は小中一貫・接続教育という形で進めておりますが、今後、各学校の状況を見ながら小中一貫を積極的に進めていきたいと思っております。

す。

よく中一ギャップといって、小学校と中学校のいわゆる環境の変化といいますか、そういう中で、なかなか中学校の生活に適応できなくて学校に行きづらくなるというような状況の生徒もおります。

今はかつてに比べると小学校と中学校の垣根は大分低くなってきていると思います。小学校が中学校の授業を見たり、中学校が小学校の授業を見たり、教員同士の交流もしていますので、そういう面では良くなってきておりますが、まだまだそういったギャップがございます。義務教育の9年間を見通した教育、カリキュラムをしっかりと作っていくということで、義務教育を出る時にはこんな生徒を育てたいという目標、夢を持って取り組んでいかなければいけないということを強く思っているところでございます。

<藏田市長>

小中一貫と良く言われますが、9年間の中で、例えば、小学校の低学年から見た中学生、小学校の中学年から見た中学生、小学校の高学年から見た中学生では随分と差があると思います。

普段いつも一緒に遊んだり面倒を見てくれたりする年上の方が、中学生になったらものすごく大人になった、すごく成長したように見えてきます。やはり中学校というのはすごいというのがあります。先輩が言ってくれる、お兄さんお姉さんが面倒見てくれるというので、ものすごく頼りがいが出てきます。

これが、遊びに繋がり、勉強に繋がり、地域の子どもたちの輪を保っていると思います。一緒にやっていく中で、先輩が後輩をしっかり面倒を見てやらなくてはいけないという意識は子どもたちの中で芽生えてくるのではないかと思います。子どもたちにはそういう風になってほしいと思いますが、どうでしょうか。

<織田委員>

小中一貫教育というのは、皆さん色々な所でよく御存じだと思うのですが、学校現場では、なかなか難しいだろうと思います。

移動するということもすぐ側なら簡単ですが、ちょっと距離があれば、子どもたちを連れて動くということも大変です。先生方も教科制の担任の中学校と学級担任が関わっている小学校と違いがあります。言葉では簡単に言われるのですが、なかなか難しいと思います。

<藏田市長>

今まで小中一貫の話の中で、先生の立場からのお話というのは余りでなかったですね。その辺りは私もわからない部分もありますが、渡部委員いかがでしょうか。

<渡部委員>

例えば、附属小学校、中学校みたいな同じところに居れば色々な面でやりやすいですが、物理的に離れているとなかなか実際問題として難しいと思います。

教科の面で、例えば英語という問題がありますが、それは先生方で努力してつながりをうまくできると思うのですが、もう一つは市長がおっしゃったように子どもたちの心の成長ですね。小学校として独立していれば、6年生というともう自覚が出て、下の学年の子を面倒みるというリーダーシップを養成する非常に重要な時期です。それをさらに上の人がいるとリーダーシップを発揮するという経験が少なくなります。そういう問題もあり、離れている場合はそれなりにメリット、デメリットがあるし、非常に試行錯誤といいますか、そういう中でより良いものを求めていくということなのだろうと思います。

先生方が主体的に取り組まなければならない問題だけに非常に悩みも大きい問題で、そういう悩みも教育委員会としてもしっかりとサポートして、この一貫教育、接続教育を支援していくことが必要だと思います。絵に描いたようにはなかなかうまくいかないことがあるのではないかと思います。

<藏田市長>

小学校だけだったら6年生になったら1、2年生の面倒を見なきゃという気になると思うのですが、おっしゃられるようなこともあるんですね。

これがスポーツに関したらまた違った目で見られます。すごいという目で見ることができたら、すごく努力する可能性があるそうです。これはついていけないと思ったらだめですが、すごいという目で見ると子は努力して頑張るそうです。

この話は次の生涯学習の方へ持っていかせていただいて、11-5で生涯学習のことも書かせていただいております。異文化交流も、自然体験も子どもたちが様々な事が学べる、学校以外の本当に自分たちが学ばなければいけないものと、それからそうしたことを学んできた人がもっと楽しみたい、あるいはそういったことを教えてあげたいというのも随分あると思います。

国が1億総活躍時代ということを使ったわけですが、何十年後も人口1億人を保つということも大切ですが、今、医療、介護、年金、保険がどれだけかかっているか。これをいかに減らしていくかということが大切だと思うのですが、自分が元気でなければ生涯学習できないわけですから、自分の健康もしっかり保っていただきたいし、年齢関係なしに元気でやっていただきたいです。京極委員、いかがでしょうか。

<京極委員>

そろそろ私は高齢者の中に入りますが、いずれにしても、それぞれの方がそれぞれの趣味を持っておかなければならないし、それは地域の仲間との連携にもなるのかなと思います。

それぞれ努力をしてやらなければいけないと思いますし、強制的にやらせるものではないと思います。子どもと同じように、やはり楽しいと思わないとやらないし、ゴルフをやるとかそういうことがあれば、またそこで仲間ができるわけで、そういう場というのはできるだけ増やさなければいけないのかなと思います。

生涯学習というのは非常に難しくて、どういう形で、例えば我々大学が関われるのか。

ただ公開授業などをやっているだけでいいのかなというのは少し感じるころもありますが、仕組みを聞かれると少し難しいところもあります。

いずれにしても、子どもたちにとれば、先程の話にもありましたが、いつも市長もおっしゃてるように、プロフェッショナル、本物をちゃんと見せる。これが大事ですし、これはすごいと思うともう少し頑張ろうかと思えますよね。そういうことでは、そういうものを見せられる場をたくさんつくっていくと良いのかもしれません。

この前、ラグビーがすごく活躍しました。そうするとみんな集まります。やっぱり見ていると凄いいねと思うから集まるのだと思います。そういう面では、先程のスポーツの話、渡部委員の話になるかもしれませんが、東広島市ではこれだよというのがあれば、またみんなそこに入っていくと思いますので、そういうところをみんなで発掘をしていくしかないのかなと。あまり大風呂敷を広げてやっても仕方がないので、小さいところでもきっちり物事をやっていくことが大事かなと思います。

<藏田市長>

子どもたちの色々なスポーツの話の前に、生涯学習を先に言わせていただいたのは、みんな元気であっていただきたいという思いがあります。

渡部委員に東広島市の健康体操をつくっていただいております、この健康体操を私たちもっと広げなければいけないのですが、自分たちに合った運動ができる、これが一番の健康だと言われまして、走ることが好きだけど、あまり走れない、じゃあ軽いジョギングだけでどこまで自分ができるかというのも、これも自分に合った運動だそうです。

とにかく運動するということでダッシュしてめちゃくちゃ体を鍛えてという、そうではなくて健康運動というのがあるそうです。その辺りを渡部委員の方からお話をいただきたいのですが。

<渡部委員>

生涯スポーツ、生涯教育というのは、子どもの頃から高齢者の事をイメージして教育しなければいけないと思います。中には、忘れてしまっても体に身につけているものもたくさんあります。

それが、将来、趣味として、働き盛りの時もそうですが、リタイアされた後でも、それが基になって、例えば、子どもの時に吹いていたハーモニカがきっかけで皆さんと仲良くなれたり、あるいは、歌を歌ったり、踊りが得意な人はそうした一つの輪ができます。そういう意味では、学校で教えるというよりは地域の文化センターや地域センターなどが良いと思います。

これから考えなければいけないのは、子どもたちの多様な要求に対して提供できる技といますか、そういうところを考えていく必要があると思います。スポーツの世界でいいますと、スキージャンプ少年団とか、野球少年団とか、そういう組織ができて結構成功しているのだと思います。トップアスリートを目指す人もいれば、趣味程度で仲間とできるというのもあります。

もう一つは、スポーツではなくて、文化少年団みたいな、まさに和文化というのは一つの大事な宝ですが、そういう子どもたちが小さい頃から、先程の一貫教育ではありませんが、お兄さん、お姉さんと一緒にそこで体験をしながら、一生使える文化を自分に身に付けるといえるのか、そういうことがこれから大事ではないでしょうか。そういうことを育成していくということが大事なのではないかと思います。

また、総合型地域スポーツクラブというのを何年か前に文科省の肝いりでやっております。これはリーダーが頑張っているうちはいいけれど、お忙しいとかで、なかなかうまくいかない。うまくいかないということを何とか、学校以外のところで育てる方法を、スポーツ以外の事を含めて考えていく必要があるのではないかと思います。

<藏田市長>

お父さん、お母さんが自分の好きなスポーツを子どもにさせる、どうしてもそうになっているそうです。ですから、子どもがやりたいスポーツ、子どもの一番身近なスポーツというのは、お父さんお母さんがやっているスポーツになるそうです。

お父さんが野球をやっていると、野球の話をしたりキャッチボールをしたりして、それが自然に身に付いたり、柔道をやっていると柔道が自然に身に付いたり、そうなるそうです。子どもたちは、わからないうちに親が言うからやりだしたというのが大半だということです。

そうした中で、プロ野球選手になった方のことですが、実はプロ野球選手を目指していたのではないと言っている方がいます。お父さん、お母さんは陸上の選手で、小さい時から一緒にジョギングしようとか、ずっと一緒に走っていて、お父さんもお母さんも地域の運動会に出たらめっちゃくちゃ早いと。それで、足が速いのは格好いいなと思っていたと。どうやれば早くなるのかとずっと見ていたら、お父さんがこうやって走れ、ああやって走れと。そうしてやっていたら早くなって、今度は学校でソフトボールとか色々なことをやる中で凄く目立ちだしたそうです。それがトントンと上がって、中学から高校も野球をやらなかったかといって引っ張られて行って、プロのアスリートになっているわけです。

野球でなくてもそういう素質を持っている子が随分いるわけで、今度、東広島でも全国の高等学校の体育大会の中でレスリングとサッカーの会場になっています。別に自分にそんなに興味がなくても、見たら興味を持って頑張りだす子が随分いるそうで、環境の変化とか、子どもたちに如何にそうした刺激を与えてやるかということが大切なのではないかと思います。そうしたことが、ずっとここで頑張って、ある程度の高齢になっても自分が趣味として続けて行けば、一番の自分の体力に合った最高の生涯学習になるのではないかと思います。

それ以外にも、実は生涯学習で頑張ってもらいたいものは随分とあるわけですが、女性の方から見られた立場で、少しそうしたことをおっしゃっていただければと思います。

<長嶋委員>

個人的にはスポーツだけではなくて、音楽、芸術的なものも同じことが言えるのではな

いかと思います。

特に東広島は吹奏楽もたくさんあって、どの学校も力を入れて良いと思うのですが、中学校を卒業してしまうと、その後に演奏する場がどうしても限られてくると思います。

東広島にはとても素晴らしいジュニアオーケストラがありますけれども、それはやはり小さいお子さんしか入れない。そうではなくて、色々な世代の人が入っているオーケストラでもいいですし、ウインドアンサンブルのような、吹奏楽のような、そういうもので、年齢を重ねてもみんなと一緒に音楽を通してコミュニケーションができるような、そういうものが色々なところにあるとは思いますが、やはりこれも活動の場が少ないのではないかと思います。

活動していただいて、入っていただいて楽しんでいただく、演奏するということが楽しみだと思しますので、みんなで練習したものをみんなに聞いていただくというような、これはいくつになってもできることなので、生涯学習の方で進めていただければと思います。

<藏田市長>

ちょうど芸術文化ホールもできますし、高齢者になってもバンドをつくられたり、自分たちで発表会をされたりしても良いと思います。

中学校までは頑張っているけど高校へ行ってもやらないですとか、その高校にはそういうものがないという環境の変化もあると思います。自分がやりたいと思ったら、そういうところも選んで学校も行っていただきたいところもあります。そうすると通学時間がかかったり厳しかったりするところがあるかもしれないですが。

<長嶋委員>

それから、大人になってから仕事をしながらでも一緒に楽しめるような会というか仲間というか、そういう活動を広げていって、いつまでも音楽に触れていただきたいなと思います。

<藏田市長>

音楽は国境がありませんからね。いい音楽、楽しい音楽、テンポのいい音楽。また、そういう方々は全然弾いたことのない楽器でも、テンポさえわかれば少々の楽器は演奏されますからね。

今おっしゃっていただいたように、子どもたちもジュニアオーケストラ、マーチングバンド、中学校の吹奏楽などで頑張っていると思いますが、小中学校の時にもっと輝かしてあげたいと思うところがあります。皆さんの素晴らしい拍手、やりがいがあるなという環境をつくらなければならない。

織田委員も指導されてきた立場から子どもたちの輝く場所をつくってあげたいということも随分あったのではないかと思いますのですが、いかがでしょうか。

<織田委員>

和文化教育も必要ですが、子どもたちが一生懸命に取り組んだ文化的なことやスポーツで自分たちが評価されるということで、感激、感動して涙を流すというような、そういうものを小さい時から体験させてあげると心が豊かな人間にもなりますし、しかも、そういうものに対して一生関わっていききたいという夢になってくるのではないかと思います。

小学校も中学校もクラブ活動があります。指導する教員の人数は限られていますが、もっと地域の方を巻き込んで色々なクラブをつくっていけば、子どもたちが、将来、あのおじいさんに教えていただいたグラウンドゴルフをやってみようとか、将棋を自分の生涯の趣味の中でやってみようとか、そういう夢が出てくるのではないかと思います。

私自身、学校にいる時は時間に縛られて、趣味的なものは一切できませんでした。でも、退職して地域のセンターの講座などに参加すると、地域の今まで関わりのなかった人たちとのふれあいができて生きがいもできます。学校や同業者では経験できなかったものを学ぶことができます。

いつから始めても遅いということはありませんし、地域センターも講座を工夫して下さっています。もっとみんなが参加できるように宣伝したり進めていただいたりすると、生涯学習に繋がるのではないかと思います。

<藏田市長>

子どもたちが色々なスポーツをしたり自分の趣味をしたり、色々なことをしていますが、自分の才能がたまたま出会ったものに、例えば、科学や本を書くにしても、いつの間にか、何となくそれが楽しいからやっていたら自分の才能とマッチしてノーベル賞になっていたということがあるそうです。でも、9割方の方は、自分に何が向いているのかわからないまま才能が眠っているそうです。できるだけ子どもたちには悔いを残さないように何とかしてあげたいと思います。

トップアスリートや色々な方々、色々なジャンルのいい体験などを体験させてあげなければいけない。これは、すぐプロの世界というのは難しいですが、先程おっしゃっていただいたように大学があります。大学に野球部も吹奏楽も水泳部もあるじゃないですか。大学を子どもたちに見ていただいて、大学の良さ、そして生徒の皆さんがどのようなことをやっているのかを見るだけでも、大学への意識が随分変わるのではないかと思います。子どもたちに対しても大学の在り方を少し変えさせていただいて、子どもたちのために活用させていただきたいと思います。

子どもたちが良かったなと思ってくれる人生を送っていただかないと私達の務めは無いわけですから、生涯学習のまず見本を見せるのが私達ですから、そうしたことを少し踏まえて、色々お願いしてみようかなと思っています。よろしくお願いします。

<渡部委員>

トップアスリートの技を見せるというのは、子どもたちにとってものすごく刺激になります。これはアスリートばかりではなく、音楽でも芸術の世界でもそうです。要するに指導者です。指導者が子どもたちの才能をいかに引き出してあげるかということ、これが決

定的なことになると思います。

トップアスリートといってもプロばかりではなくて、市長がおっしゃったように、大学の学生のレベルも、小学生、中学生から見るとレベルが高く、私も広島大学の学生に頼んで体育の時間に縄跳びや体操をデモンストレーションでもらったことがあります、子どもたちはすごく感動して拍手喝采でした。

本市には学生も協力していただける色々な分野がありますので、そういう学生も見ただくというか、そういう機会があれば大分違ってくるのではないかと考えております。

<藏田市長>

渡部委員におっしゃっていただいて、子どもたちへ何とかしてあげようという勇気が湧いてきました。よろしくお願いします。

色々と議論をしていただきながら、また、テーマに沿ってお話をいただいたわけではありますが、これまでのお話の中で、皆様の方からこれだけは少し話をしておきたいとか、何かございましたら遠慮なしに言っていただければと思います。

<織田委員>

キャリア教育につながることもわかりませんが、かつて、御薗宇小学校で上田前市長に来ていただき、話をさせていただいたことがございます。

上田前市長は自分たちとは随分かけ離れた方だという思いが子どもたちにありましたが、上田前市長が自分の生い立ちや苦労話、学生の事やこんな東広島市をつくっていかうと思うとかそういう話をされて、子どもたちは目を輝かせて聞いておりました。

藏田市長の色々なお話を伺う中で、市長のそのありのままをですね、毎日お忙しく大変なことはよく承知しておりますが、もし時間があれば、東広島市をこのような市にしたいというのを、沢山の子どもでなくていいと思いますので、ぜひそういう機会をつくっていただくと、過去の経験からも良いと思います。

<藏田市長>

そう言っていただけると本当にありがたいと思います。教育長と相談しながら、秘書室とも相談しながら時間をとることに専念して頑張ってみようと思っておりますので、よろしくお願いします。

<下川教育長>

学校は待っていると思います。

<京極委員>

近畿大学は市長に来ていただいておりますが、もう少し市民の方にも集まっていただいて、市長の思いを聞いていただけるように努力をしたいと思っております。非常に貴重な時間を割いていただいておりますので。

<藏田市長>

意見交換をしていただきながら、皆様とは、この5項目もそうですが、やはり本市の思いを共有していただくというのが一番と思っておりますので、共に頑張っていくということを再確認させていただきながら、また、本日いただいたご意見等も貴重なご意見として参考にさせていただきながら取り組んでいければと思っております。

その中で申し上げましたように、人口20万。これは権限も財源もいただかないとなかなかまちづくりができない。何をやっても全部法律に縛られていますから、本当に厳しい。これを脱皮するにはそこまでいかないと少ししんどいと思うのです。何とか頑張ってみようと思っております。本当に貴重なご意見ありがとうございました。

日程はこれで終了させていただくわけですが、次回の開催予定については、来年の春ごろを予定させていただこうと思っておりますが、色々なことで協議や調整も必要ですから、随時開催していくための準備はしてまいりますので、その際にはご協力いただければと思います。よろしくお願いします。

本日はお時間をいただきまして、誠にありがとうございました。

○閉 会